〔俗神道大意〕扨マタ、往古ヨリ致シテ、伊豆國ニハ、曆ノ博士ガ居ッテ、三島明神ノ下社家川合龍節ト申ス曆師ガ配リ、公儀ヘモ曆ヲ獻上イタシ來レル事故、伊豆一ケ國ハ、伊勢曆ヲ停止被仰付タト申ス事デヤ、

〔增訂豆州志稿七土產〕三島曆　三島驛、河合氏製ス、目下豆相兩國ニ行ハル、其家傳ニ云、光仁天皇寶龜中、三島宮神領內、曆門（コミカド）埋橋ニ、六百坪ノ宅地ヲ構ヘ住ス、宣明曆迄曆算ヲ爲シ、之ヲ天朝ニ獻ズ、又奕世將軍家ニ獻ズルコト今ニ至ルト、現今ハ公儀ヨリ寫本下附アリテ、之ヲ板本トナス、宅地內ニ曆宮アリテ、社宮司明神ト云、〇中略　增、三島曆、明治革新ノ際廢セラル、

〔空華日工集〕三月四日、〇本書前文缺失、年號不詳、好古日錄引用本文作應安七年、浴于伊豆熱海、蓋三島曆、以是日爲上巳節、故作詩記、

〔好古日錄本〕曆日異同〇中略

按、古昔曆法精シカラズシテ、此間ト異邦ト奇偶一日ノ相違ノ類間アリ、日工集載ル所ノ如キハ、京曆ト三島曆トノ異同ナリ、長曆ニ據ニ、應安七年正月二月共ニ大ナリ、當年ノ三島曆同ク正二月トモニ大トミユ、京曆正二兩月ノ間小アリテ、三島曆ノ三日、京曆ノ四日ナリシナラム、

〔類聚名物考時令三〕三島曆

今の世にも假名文などの甚だ細かなるを三島曆のやうなるなど云り、昔は伊豆の三島より曆を出せしとかや、今伊勢より多く出すが如し、薩摩陸奥にもあれども、それは人もいはぬ事となれり、近年久しく絕しを興して、また三島にても曆を出すなり、竹齋物語上頭巾は三條唐物や甚吉殿のおかたより、赤き綿を百日ばかりのその內に、心を盡し、縫立て、播磨杉原七枚つぎ、三島曆に大般若、春の日通牛の尾に、三間綱を結付て、長文そへてやられける、

〔實隆公記〕文龜三年六月廿七日壬戌、則大外記來謝之、午後在通卿來、携一腰金出頭事珍重由命之、予以